ーただキリストと共に歩むー

水 戸 無 教 会

第五十五号

編集 半 田 梅 雄

※※※

職業と人生……………………………………………鈴 木 武 直

後 記

※※※

職業と人生

鈴 木 武 直

あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している（ピリピ人の手紙一ー６）。

世界一の理髪師にならうと思う

私が現在の職業に従うようになったのは、両親のすすめであり、自分でも喜んで修業する気になったからでもありました。

弟子入りして白衣を着せられて営業所に立たされた私は、その瞬間〝世界一の理髪師にならう〟と思ったことは今考えると不思議でなりません。爾来四十四年大正昭和の激動激変の渦中にしかも世渡りの下手な私が今日まで大禍なくやり通して来られた

ことの中に、大いなるそして、お恵み深い神の御導きを感じない訳には行かないのであります。

やればできる

技術を身につけるためには並大底の苦労ではありません。初めから世界一にならうと思って居る私は、何人よりも勝れた技術を身につけるにはどうしたらいいかと子供心にも思ったのです。先づ第一に誰でもできることで誰よりも上手になろうとして、実行し初めたのが床を掃くこと、刈り落された毛髪を、技術を行って居る人の邪魔をしない様に処理することでした。萬時このような心構えですべてのことにあたって、一つ一つの技術を修得して、二年後にはその上達を褒められるようになったのです。そんな訳で〝やればできる〟と堅く思うようになったのです。

先生は一人

剃刀は何丁も持って、代る代り使うものなのですが、最も自分の心にかなう物は、一丁だけなのであります。何十丁持って居ても最後に残るものは一丁だけなのです。よく世間で、誰からでも善いことは学ばなければならないと言いますが、それは表面だけ、小手先のことならいざしらず眞の技術を身につけ、極意を受けつぐのには、そんな訳には行かないのです。その意味でも私は誠に恵まれました。私の師となるべき人が私の前に顕れ、その先生は理髪のことだけでなく、クラシック音楽の手ほどき、それに「聖書の研究」（内村先生発行）なども読んで居たり、文学書や絵画などにも深い関心を持つような、大きな影響を与えられたのです。

それは凡て理髪の技術を学ぶ上に、大きな役割を果して居たのです。私は一から十までこの先生を先生として、他の人は顧みませんでした。それは私にとって、最も幸いなことでありました。

職業名の移り変り

髪結い床、髪床、床屋、散髪屋（関西地方）理髪、理容、こんなに職業名が変り未だにはっきりした職業名のない職業は、他に類例のないことであると思います。それだけに私たちの職業の性能また性質が一般にも、また業者にも正しく理解されて居ないか

らであらうと思います。それはともかくとして、理髪という職業は、どんな社会情勢の変化にも大した影響を受けない、デフレ、インフレ、新円切替、封鎖のようなこともさほどの影響を受けないのです。彼の大戦争の空襲の最中でも、髪を刈らうとする人間的欲求はなくならないばかりか、そのような時程益々強い要望の起るものであることを知らされた訳です。

二つの性質

どんな時でも、髪を刈らずには居られない、髪の手入れをしないでは居られないというのが、人間の極めて自然の情である。この理髪の技術には、生活の便宜上のこと、また快感それに美観を満足せしめようとする二つの性質をもって居るのです。

生活の便宜上のためのものは、機械的に行動すればよいのであるから、大した問題はないのであるが、美的感覚を満足せしめる・・・技術を行なうことによって、外観上その人にふさわしいものとするということになると、これは重大なことになります。これを追求すれば、畢竟人間は何んであるかを知らなければならないことになるのであります。この点理髪師は大哲学者に勝って悪いということはないのであります。勿論大哲学者でなければ理髪の技術者になることはできないということはありませんが、技術者となった者にとっては、自己の良心の問題となって来るのであります。

「あなたの髪が横になるか、また縦になるかはフルシチョフがアメリカの大統領になる、またケネディがソビエットを支配するようなことがあるよりも、私にとっては大きなことなのです。」と或る時話したことであったが、決して大げさな表現ではないのです。髪の毛一すじの處理のしかたで、その影響は決して小さいものではないのであります。これは技術上のことでありますが、職業を通して、家庭の人、また社会人、そして国民として如何にあるべきか、また職業を通して如何にして正常なる世界観に立つことができるであろうかと考え、そのような自覚が、どのような働きをして、どのような意義をもたらすものであろうかと、考えた時に、私たちの職業も、他の如何なる職業とも同じであって、軽視されたり、蔑められたりすることは許されないのであります。

使命

「木口小平はラッパを口にあてたまま敵の弾にあたって倒れました。それでも口からラッパをはなしませんでした。」これは小学生になった私たちが声高らかに、読みあげたもので、木口小平という人は、ほんとうに偉い人であると子供心にも強く思ったことでありました。

その人はその人らしく生きるということは容易なことではありません。高尚な理想なくして、ただ楽しく多くの収入を得たいと思っても、その欲望がかりに充たされたとしても、決して甚ばしきことではありません。徒らなる享楽を追ったり、守銭奴的な生活の空しいものであることは、古来の人々の述懐に聞くまでもないことであります。秀吉の「露とおき露と消えぬるわが命難波のことは夢のまた夢」やソロモン王の「空の空なるかな、いっさいは空である。」などは凡て人の周知のことでありますように全く、そのような欲望を充たそうとする末路はまことにあわれなものであることはいうまでもないことであります。

衣食足りて礼節を知るといわれますが果たしてそうでありましょうか。衣食足ってからでなければ知ることのできないような礼節は、眞の礼節でないことは何人も知り尽して居る筈なのであります。物質的に豊になれば、人間として価値のある生活ができるかというにそうではない。時間的に余裕があれば意義のある活動ができるかというに決してそうではないのです。

これは自分にとって、是が非でもやらなければならないことであるという、強い意志が起って、初めてなし得るのです。経済的にまた、時間の余裕があるような時、その時こそ反って、眞に成すべきことができなくなるようなことの方が多いのではないかと思うのです。大事な要件を依頼する時は、暇で遊んで居るような人にたのむものではない、とは世馴れた人の常識であります。それはともかくとして、私のように四十余年同じ職業に大した事故もなく、続けられたということは、自分の意志や周囲の要望だけで、できるものではないということを痛感せしめられるのです。

福沢諭吉という人が時の政府から教育功労者として叙勲の沙汰があった時、自分は教育者として、教育のために、自身を投じたのであるから、それによって、いささかのことがあったからといって、あたりまえのことである。自分のようなものにどうするというよりは、隣家の豆腐屋や、車を引く事を業として、多くの人の便宜をはかって居る人々に、眞先に勲章をやってほしい。というようなことをいわれて、自分の受賞を断ったということであ

るが、これが、士、農、工、商、と職業の階級をはっきり付けて居た時代のことであるから驚きます。職業には貴賤はなく、全ての職業は平等である。〝天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず〟といって凡ての人は平等であることを、身をもって生き、他人にも徹底させようとしたのであるからたいした人だと思います。福沢諭吉という人がこのような態度で、自己の職業に徹し、自己の職責をまっとうできたのは、教育という事業に深い使命を感じて居たからであると思います。

日本語の職業という字をどう読んでも、職業という意味を引出すことはことは甚だ困難であります。業という字は佛教のカロマから来て居るとすれば、いささかの意味は感じられないこともない訳ではありますが、天職となると職業本来の意味がいくらかは感じられるのではありますが、英語ではコーリング（calling）、ドイツ語ではベルーフ（Beruf）というのですが、英語のコーリング（calling）もドイツ語のベルーフ（Beruf）も同じ意味で、〝呼び出す〟という言葉であります。職業は、救主キリストの神が、私たち一人一人を、羊飼いが一匹一匹の羊の名を呼んで檻からつれだす（ヨハネ一〇・一三）ように、一人一人をよく知って呼び出すのであるというのです。コーリング（calling）もベルーフ（Beruf）も、職業の厳粛で深い意義を伝える言葉として、ほんとうにふさわしい言葉であることを感じさせられます。このように職業というものは、その職業にたづさわった者が、それによって、何物かを得ようとする下向きの姿勢よりも、偉大な力に従って行かなければならないのであるという、上向きの姿勢の大事なことを知らなければならないのであります。そのことの意義がわからなかったら職業の何んであるかを、知ることはできません。そして偉大な力に支えられて歩まされて居るのであるという目覚めのない限り、その人はその人らしく歩むことはできません。従って自己の職業に従うことの眞の歓びはなく、自己の職業を誇りとするような心境にはなれないのであります。職業を通じて、強い使命を感じてこそ自己の職業に誇りをもち、明るくそして、高い希望が起って来るのであります。

生活の原理

一般に生活というと経済のことを思う、しかしそれはあくまでも、第二義的なもので、如何に人間らしく生きるかということにあるのでありまして、人間が人間らしく生きるということは、如

何に道徳的に生きるかということでありまして、人生の眞の目的は、高い品性を備えるにあるということができます。内村先生が京都に居られた時のことですが、奥様の実家を訪問された、実家では、先生の御生活の窮状を察せられて、米やもちをさしあげたのです。一応は有難くいただいて帰途についた先生は、途中現在の生活の不甲斐なさを辱じ、通りかかった五條の橋の上から、もらって来た風呂敷包みをそのまま川の中へ投げこんで、さっそうとして帰宅されたことが、少年物語となった内村鑑三にあったのを読んだのでありましたが、心の引きしまる思いがしました。

生活の目的が判然としないと、生活に密着して居る経済のことに迷い、まどわされ勝ちになるのです。しかしこの経済ー物とか金ーに対するはっきりした考えを明かにすることは缺くことのできないことなのであります。内村先生の「商人と宗教」というパンフレットの中で、「金をたくさんもうけたということは、決して、もうけない人の思うほど、幸いなものではなく、ある意味ではかえって不幸なことである。富者であるという誇りのうちにあって得意の人もありますが、およそ人がその所有する物質をもって誇るときは、その人の品性は、はなはだしく下落した時である。そして富は人と人との関係を不純ならしむるものである。富者に対しては、たいていの人が、へつらいと卑屈といつわりをおこないます。うわべだけ富者を尊敬します。気に入りそうなことを、おこなったり言ったりします。けれども腹の中ではわるく思っています。従って、誰でも実意というものを示す人はありません。富者は人々から形の上だけでうやまわれて、心では遠ざけられるのであります。従って、世に富者ほど孤独なものはない、かつまた富者の前にたくさんの人が屈従するのを見て、富者は、人間がいかに卑しきものなるかを感ずるのであります。金の前に拝跪する人間のみにくさを痛切に見せられるのであります。すなわち富者は人間のうちのつまらぬ人のみが目につきます。云いかえれば金は人を見せしめるものであります。」と金銭や物に対する人間の姿を具体的に述べて居ります。金は生活の上で極めて重要な位置をしめて居りますので、これを正しい認識の上に立ってこれに当たるか、そうでないかは、精神生活を重ずる人生にとって大きな問題となって居ることであることは云うまでもないないのであります。物と云い、金と云い、これを卑しめたり軽ろんじたりする事は出来ません。正しく使用することができれば大きな力とすることができるからであります。家庭を健全に建てる基本ともなり、社会を益し、隣人を助けることもできる、国に正義を

行わしむる原動力ともなる尊い器ともなるからであります。人間を誤ませるものも金、執着せしめて人間生活を虫ばむのも金、しかし恐るる必要は決してありません。勤勉と質素とをもって、大膳に活用することによって、生活を前進せしむるようつとめるべきであります。

カイザルのものはカイザルに

だれでも同時に二人の主人に仕えることはできない。こちらを憎んであちらを愛するか、こちらに親しんであちらを疎じるか、どちらかである。あなた達は神と富とに仕えることはできない。（マタイ六・二四）いつどんな時でも、、迷うことなく自己の生活を正しく進めることのできる道はただ一つだけです。或る時イエスをおとしいれようと、たくらみをもった者に、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返せ。」といったので、おとしいれることができないばかりか、そのうけ答えぶりに驚きながら黙ってしまった。（ルカ二〇・二〇～二六、マルコ三・一三～一七、マタイ二二・一五～二二）カイザルの物すなわち金、金には金としての分がある、そして神のもの、それは人間の自由意志、すなわち魂。この自由意志は神からいただいた人間にとって一番大事なものであるので、これはどこまでも神のものとして、きずなく、汚れないものとして守らなければならないのです。そして神のものは神に返せといわれたように、私たちの魂はあくまでも、神以外の金やその他のものに奪われることなく、神に返さなくてはならないのであります。〝だからあなた達は、天の父上が完全であられるように〝完全になれ〟（マタイ五・四六）とあるように、私たち人間には、どうしてもそうしないでは居られない、そうなりたいという重要な面のあることを知らなければならないのであります。

充たされし希望

しかし人間というものは弱いもので、迷いやすく、禍誤を犯しやすいものです。四十にして迷わず、五十にして天命を知る。とありますが、そういう面もあります。しかし人間は幾つになっても迷います、動揺します。眞剣に生きたい、また生きなければならない、そう思って生活に当るのですが眞剣になればなる程思うように行かない弱い自分を発見させられるのであります。私は獨

立して同じ場所で営業するようになってから満三十年以上になりますが、開業した時から現在まで何の進展もありません。いささかの設備の改繕はできたといっても、経済的な発展は得られなかった。私は三十年間営業して、店が古くなったのと、よくも年をとったものだと思う位で見るべきものは何一つないのです。営業の成果である物質的なものでは、私の今日までの働きは全く見る影もない姿なのであります。しかしながら少年の時、心に描いた〝世界一〟は内容は変りましたが、たしかに自分は世界一の理髪師であるという自覚に立ったのであります。失敗したとか、成功したとかの外側の条件に左右されない、目には見えないが、これこそほんとうに生甲斐のある新しい希望の世界が、頑固な私の、魂が打ちくだかれて、その上に新しく、建設されるようになったのであります。そして現在の境遇を心から喜び感謝しないでは居られない心境に立たされたのであります。そしてキリストを信じ、キリストに頼りたのむ生活は、どんなに巧みな経済的に優れた知者にも勝さるものであることを教えられるのです。「空の鳥を見てごらん。まかず刈らず、倉にしまいこむこともしないのに、天の父上は養って下さるのである。あなた達は鳥よりも、はるかに大切ではないのだろうか。」（マタイ六・二六）たしかに多くの人達は生活の建てかたをとりちがいて居るのです。人間としてのあるべき姿を失って居るため、得ようとして益々失うようなこととなって行くのです。人間として価値のあることを成すのにはどうすべきであるかということを探求しなくてはならないのではないかーー人間が真剣に求めるべきもの、それは神の国と神の義であると聖書にありますが、私もそうだと思います。そしてそれは、萬人にとって、生活の基本とならなければならないものであると思います。若し神の支配する御国と、神に義とされることを求めることを第一のこととし、最上のこととすることができるとするならば、そのときからほんとうに、あすのことは心配する必要がなくなり、一日の苦労は一日の毘びとなり、感謝のうちに終ることができるようになるのであります。

奉　仕

今まで述べてきたような心境になって、職業を営む時、自然と奉仕の精神が溢れて来るのであります。奉仕の精神に立って成す職業は凡て聖職であります。そしてこのような心境に立って成す職業に供う勤労こそ眞に尊ぶべきものであります。パウロがテサ

ロニケ第二の書で、福音を宣べ伝える者の態度を極めて具体的に述べているが、（テサロニケ第二、三・六～十六参照）凡ての職業人が、自己の職業を神に捧げて、神と偕になす職業、これが眞の職業であり、そのような自覚に立ち得た時の職業による労苦、苦痛は、神の慰めとなり、はげましとなって、そのような人の職業を通して、神はご自身の栄光を現すのです。そしてそのような人々によってなされる職業にふるる人々をも、神は救いに導かれるのであります。このように信仰に立って成す職業こそ眞の奉仕と云われるべきものであると思うのであります。

「人の子がきたのも仕えられるためではなく仕えるためであって、多くの人のあがないとして、自分の生命を与えるためである。」（マタイ二〇・二八）

――以上一九六六年五月二十二日、水戸南町二丁目商店会館で水戸無教会聖書集会で述べた話の要旨

彼の時の話は奉仕の所はほんの少し切り述べられませんでした。この後「人と人との関係」「社会的前進」と用意した原稿には少しも觸れることができなかったのは残念でした。

七月二日夜

後　記

○五月一日、山形県よりキリスト教独立学園高校の鈴木弼美先生来水、イザヤ書一章についてお話をして下さった。〝旧約の神は、義の神だというがここでは愛の神として語りかけてい給う。信仰は形式や儀式ではない。今から二七〇〇年も前にイザヤが激しい言葉で形式主義、儀式主義を批判している。ここにも無教会精神が鮮烈に打ち出されている〟おだやかな中に凛としたお話であった。

○五月一六日、米子の藤澤武義先生が北海道伝道旅行の途次お寄り下さる。〝求道〟誌がそうであるように、先生のお話は、激しく、鋭く、そして何よりも生きた信仰そのままの感銘を与えて下さる。お話は〝復活〟について。〝キリスト教の歴史的成立は、復活による。生前のイエスの弟子たちは、眞の意味のクリスチャン、キリストの信仰者とはいえない。何故なら、彼らは現世的願望を持ち、一般のユダヤ人と同様に、イエスによって現世的神の王国が直ちに成るように信じておったからである。しかし、十字架と、その後に起きた復活によって、弟子たちは、キリストの来り給いし眞の意味を悟り、その生命にふれて一八〇度の転回をす

る。これがキリストの生きた証人であり、この時始めてキリスト教は、根をおろすのである。死は生物学的な法則であるが、キリストは、死の拘束を超越された。キリストは、死を超えて復活された。だから、罪を完全に赦すことがおできになるのである。義とされるとはこのことである。使徒行伝二章は有名なペンテコステの記事であるが、ここでペテロが弟子団を代表して堂々と述べている。ユダヤ人の永い歴史的経過の中で神との結びつき程強いものはない。その神がみ子イエスをつかわし給うた。み子は頑固な利己主義の人々によって十字架上に殺されたが、三日目に復活し給うた。我らはその証人であるとペテロはいう。精神病者でもなければ、酒に酔っていうのでもない。我らはその事実を見た生きた証人であるとペテロがいう時、彼はもはやイエスに〝ひっこんでいろサタン〟と叱られる世的人間ではない。彼は全く新しく造られた者となっているのである。パウロの不死身の強さも同様に、心身共に神によって新しくされた者の強さである。復活のイエスを通して、彼らはほんとうに、心身共に強くされたのである。

このようにキリスト教は、生きた復活の証人によってはじめてこの世に眞の姿を示すのである。

以上は極めて拙い要約であるが、先生のように、自ら復活の証人として、立たれる時、不平も不満も不安もすべて消しとんでしまうであろう。まことに学者いづこにかある。この世の論者いづこにかあるという感じであった。

○五月二二日、東京で理髪業を開業しておられる鈴木武直兄を、南町二丁目商店会館に迎える。お話のテーマは〝職業と人生〟であり内容は本文の通りである。無教会人の中でもユニークな存在であり、しかも豊富な人生体験の中に、純粋な信仰が清冽な流れのように輝いている。今回お忙しい中を貴重な原稿を頂いたので発表させて頂くことが出来感謝はつきない。

○今年も横川鉱泉での夏期集会が、八月二十日二十一日に持たれる。御加禱下さい。

（半田）

水戸無教会第五十五号
編集人・印刷人　半田梅雄
発行人　松本文助
昭和四十一年八月発行
発行所　水戸市東原町水戸幼稚園内
水戸無教会
（実費十二円　〒十円）